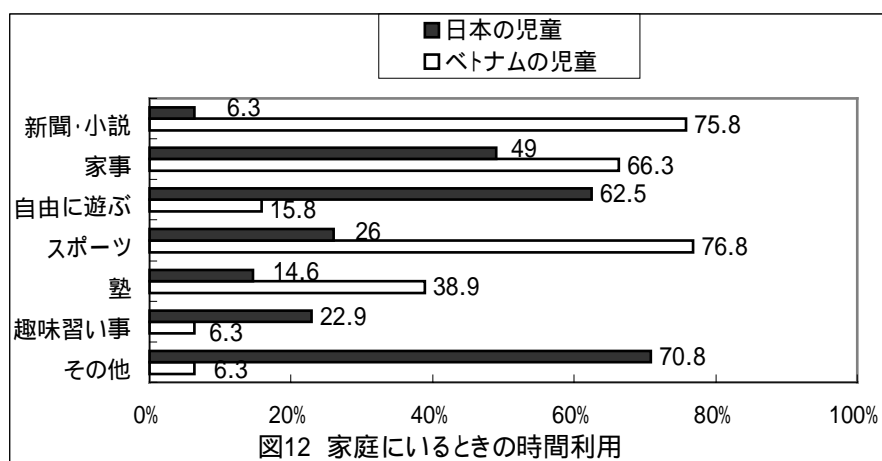


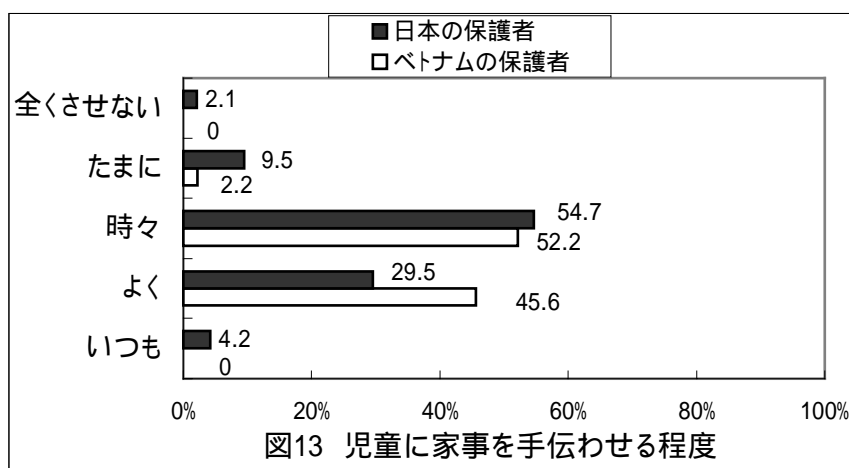
調査結果は以下のごとくである。

まず、家庭で学校の宿題をしなくてもいい時、保護者が児童にどのように時間を利用させているかを明らかにするために Q1 として設問し、その結果を図 12 に示した。これらの数字は家庭にいる時、ベトナムと日本における児童の時間利用の仕方はかなり異なっていることを示している。例えば、読書をよくさせているベトナムの保護者は 75.8% であるが、日本の保護者は 6.3% しかいない。逆に「その他」という項目をあげている日本の保護者は 70.8% であるが、ベトナムの保護者は 6.3% しかいない。また、「スポーツ」



や「自由に遊ぶ」という項目でも同じ傾向にある。

各項目の中で環境に一番かかわりの深い「家事」について、児童によくさせていると答えたベトナムの保護者（66.3%）は日本の保護者（49%）より高い。さらに、家事をさ



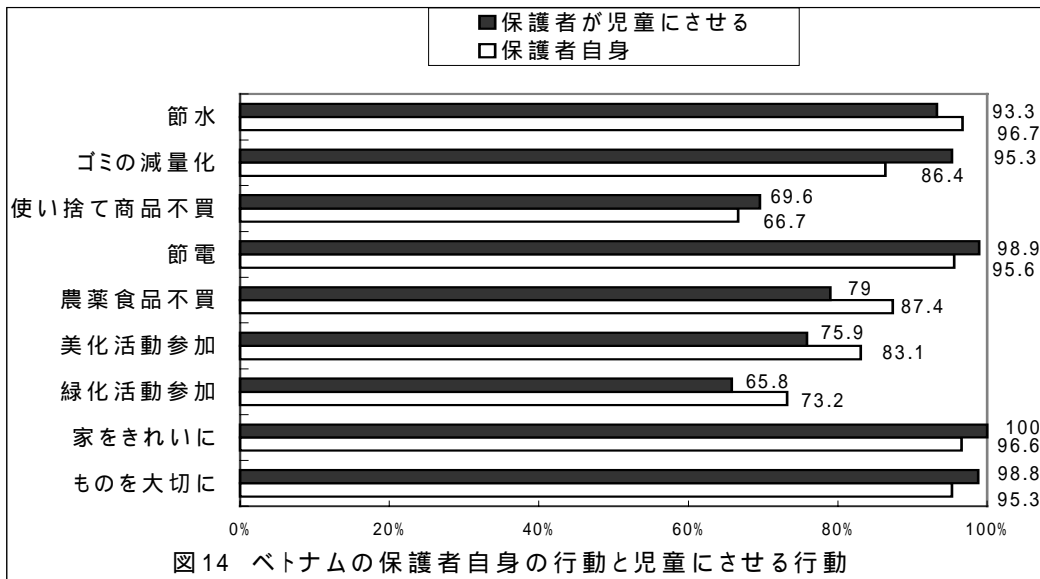
せる頻度も Q2 として設問し、その調査結果を図 13 に示した。ここでも家事を「よく」させるのはベトナムの保護者の方である。日本国立婦人教育会館の WMS (Working Mother Study) 研究会 (1985) の調査によると、子供の帰宅後の生活について、「家事手伝い」に費やす平均時間は 20~30 分であるにもかかわらず、「テレビ視聴」は 145 分、「遊び」

は87分である。それに対して、前節(p.143-144)も触れたように、ベトナムの児童は小さい時から家事を手伝わせる習慣はベトナムの家庭において現在でもまだ色濃く残っている。従って、ベトナムの児童は日本の児童と比べて、年齢が小さい時から大人と同様な仕事をする事が多く、環境とより直接的に触れる機会が多いと言えよう。また、前出の図9からも児童が「家庭の秩序と習慣」から環境教育の強い影響を受けていることが分かる。それに対して、日本の家庭では、市川昭午が指摘しているように、児童は「あらゆるものが既成商品として購入できるために、『モノ』を自分の手で創り出すという喜び、特に手仕事の楽しさを知らない」(市川ら、1988,p.31)。また、核家族化した小規模住宅、家庭の電化と専業主婦などの事情もあって、家庭内での仕事を分担する機会が乏しい。

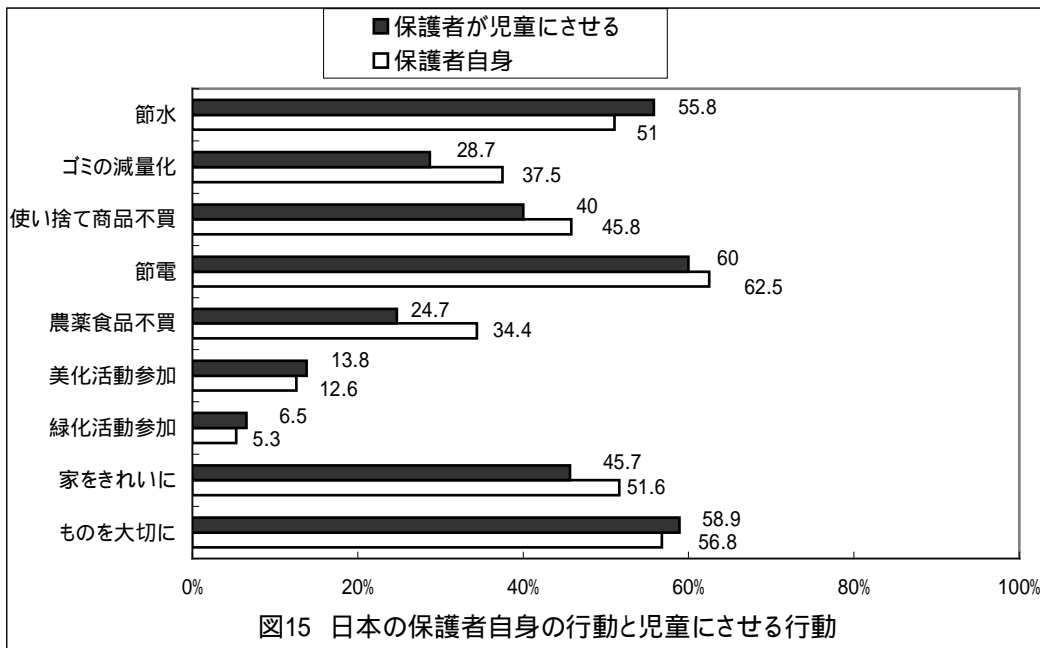
次に家庭で、保護者が環境保護にかかわる行動をどの程度を行うか、また児童にどの程度させるかについて尋ねたQ3とQ4の結果を図14と15に示した。図14にあるように、ベトナムの保護者が環境にやさしい行動をよくとることが分かる。例えば、節水、節電やものを大切にしている保護者は95%以上であり、「家がきれいになるように気をつけている」保護者は96.6%である。また、「ゴミをできるだけ出さないようにしている」保護者は86.4%である。さらに、「安い物よりも農薬を使わないものや環境にやさしいものを選択する」保護者も多い。だが、環境と自分の便利さのバランスを考慮しなければならぬ場面の「使い捨て商品はなるべく買わないようにしている」保護者は66.7%に減っている。

以上の結果から、大部分のベトナムの保護者が環境にやさしい行動として、特に節約にかかわる行動をとっているという結論を引き出すことができよう。では、なぜベトナムの保護者がよく節約をするのか。それらの行動は資源・エネルギー問題を考慮した上での行動であるのか、あるいは、ただ発展途上国における個人の利益や経済要求に起因した行動であるのかを調査した。第2章の第1節第1項目(表1p.27)で触れたように、節約する理由として、「出費を減らすことができるから」と選んだ保護者が一番多く(76.3%)、また「節約はいつもいいこととみられているから」は52.5%であり、「天然資源の節約とつながっているから」は33.8%しかいない。従って、これらの数字からベトナムの保護者の多くが節約などの行動をとるのは環境保護という考え方からではなく、経済利益や道徳の観念からであり、環境・エネルギー問題の深い認識から出発した行動とは言い難いことが指摘できよう。しかしながら、それらの行動は結果として環境にや

さしい行動であり、児童にもよい影響を与えている。図14に示しているように、全ての



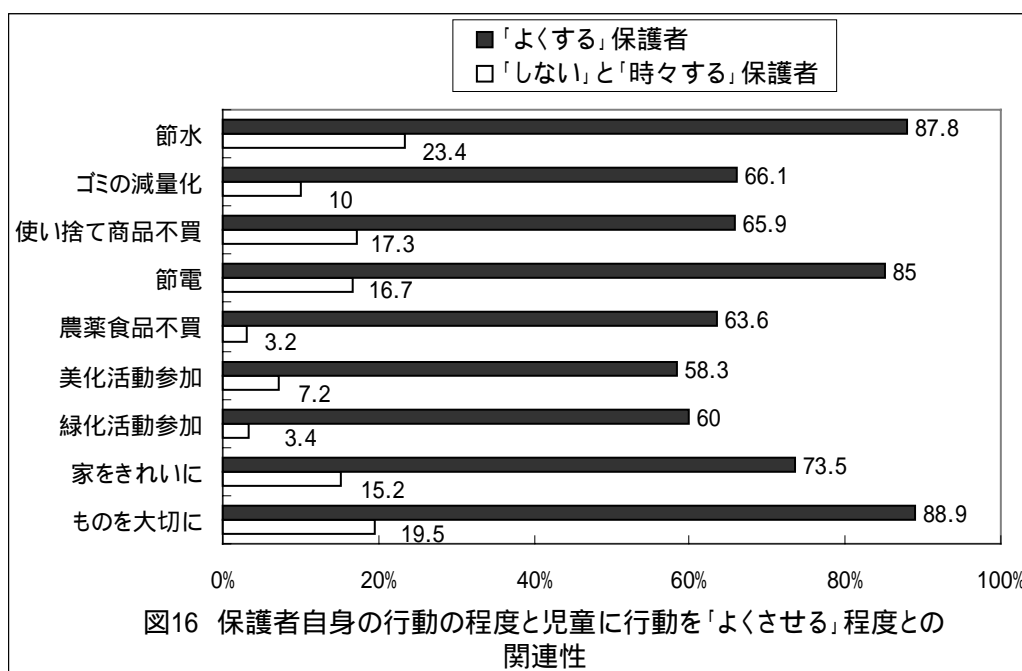
項目で、ベトナムの児童が行っている環境にやさしい行動は保護者によって促されてい



る場合が多い。それに対して、図15に示している日本の方は、保護者の行動も、児童の行動も少ない。従って、調査の結果からベトナムの保護者が環境にやさしい行動をとっている理由は環境問題の深い認識から出発したものでないのであるが、それらの行動と、ベトナムの家庭の習慣や秩序は児童の行動形成に重要な意味をもっていると言える。従って、これらの数字は図9の結果と一致しており、「ベトナムの保護者が児童に与えている環境教育に対する認識側面より行動的側面での影響が強い」という前述の予想を裏付ける根拠となる。

図14と図15両方に示している共通点は保護者の行動は児童の行動と相関している。そこでベトナムと日本双方の保護者を合算し、自分がとる行動は自分の子どもにも「よくさせる」という仮説を立てて、その仮説を立証すべく検討を行ってみたい。

保護者に対するアンケートの、保護者自身の行動に対するQ3と、保護者が児童にさせる行動に対するQ4を関連させ、抽出した結果を図16に示した。すると環境にやさしい行動を「よくする」保護者は環境にやさしい行動を「しない」と「時々する」保護者より全ての項目で「児童にさせる」割合が高い傾向が明らかとなった。従って、環境にやさしい行動をとる保護者は自分の子どもにもそれをよくさせるという先の仮説が立証できた。逆に、環境にやさしい行動をあまりしない保護者は自分の子どもにもあまりさ



せない傾向が見られた。つまり保護者が児童の行動形成に強い影響を与えているのである。また、日本の保護者は環境にやさしい行動をあまりしていないため、児童の行動により影響を与えにくく、よくない影響を与えてしまう可能性が高いと考えられる。図16に示している日本の児童の「認識は高い」が「行動は低い」というずれはその表れであろう。

## 2.3 ベトナムの家庭における環境教育の役割

上記の調査結果の比較と分析について以下のようにまとめ、ベトナムの家庭における環境教育の役割を引き出したい。

第1に、児童の環境問題、環境保護に対する認識と行動についてである。調査結果からベトナムの児童の認識と行動の間のずれは、日本の児童よりも小さい。しかし、天然資源・エネルギー問題にかかわる項目に対して「認識は低い」が「行動は高い」という「逆」のずれはベトナムの児童の環境問題、環境保護にかかわる知識の不十分さを表している。それは、学校の中での環境教育の不十分さであり、それを克服することは学校の課題であると考えられる。

第2に、「家事」はベトナムの児童にとって、家庭にいる時の主な仕事の一つであり、環境にやさしい行動を習得する機会となり、それを通して、児童の行動形成に良い影響を与えているということである。それに対して、日本の家庭では、児童に家事を手伝わせる傾向が低下し、また、調査結果は日本児童の行動力もベトナムの児童より低いことが示しており、家事に対する消極的な姿勢と行動力の低さと関連しているのであろう。高橋(1987, p.47)も児童に家事を参加させる価値について、以下のように強調している。「…バランスのとれた生活という観点から見ると、子供たちが家事の手伝いに費やす時間があまりにも少ないこと…家族の一員として、生活する上で当然分担すべき事柄をせずに親に依存している状態が果たして子供の全人格的発達にとっても望ましいことであるかを考えると、現状の子供の生活は価値のバランスを欠いていると考えざるを得ない。」従って、現在のベトナムの家庭におけるこの望ましい習慣は維持する価値があると考えられる。また、上記のことは第3章の第2節の第3項目(p.51-53)で検討した一般家庭における行動育成の役割や本章の第1節(p.143-144)で述べたベトナムの家庭の役割と一致していることを証明している。

第3に、保護者の行動は児童の行動と関連し、前者が環境にやさしい行動をよくとれば、後者にもよくさせる傾向がある。日本の保護者と比べて、ベトナムの保護者は環境にやさしい行動、特に節約をよく行い、自分自身の子どもにもよくさせる。しかしながら、それらの行動の理由は未だ個人の利益や経済要求などにとどまり、時が経ち、生活レベルが上がるにつれて、それらの行動が変わる危険性がある。従って、保護者の環境に対する認識を高める必要性があり、現在の家庭教育の良さを維持し、発展させること

は重要である。

最後に、この調査から明らかになった保護者の行動と児童に行わせる行動との間の相関は「理論的な基礎」の第3章の第2節(p.51-53)で検討した「家庭との連携の必要性」をさらに明らかにしている。ベトナムの学校における環境教育を向上させるために、家庭と連携しなければならない点は家庭の保護者が児童に与えている行動的側面を維持し、児童における認識と行動を統一することにかかわっている。